

歪められる英語の意味と性犯罪の隠蔽

—テレビ欄にみるエイゴ表記—

佐々木恵理

1. はじめに

日本語の中のカタカナ語（外来語、その造語を含む）は未だ衰えを知らぬ勢いで増え続けている。外国語の借入には、よい面と悪い面が背中合わせで存在する。現象があるにもかかわらず、それを表す適確なことばがなかったときに、新たに導入されたことばと共にその実態が広く認知されるという側面と、カタカナ語が定着してゆく過程で、その語が本来もっていた意味から離れた、誤った意味をもってしまう側面である。あるテレビ番組で「カリスマ」⁽¹⁾の意味を街頭インタビューしたところ、「美容師」という答えが返ってきた。これはマスメディアが「特別な技術をもった超人気の美容師」を「カリスマ美容師」として紹介したことから、このような誤用が生じたのである。ことば本来の意味を知らなければ、受け手はこれを感じ覚的に受け取り、曖昧なままに漠然と使用してゆくことになる。

カタカナ語の多くが英語からの借入語であることを考えると、エイゴ（カタカナとして表記される英語）が日本語の語彙に及ぼす影響は計りしれない。こうした影響を考察する視点はいくつもあるが、本論では、英語の日本語化を女性学的視点から捕らえることにする。そのうえで、英語がエイゴとして日本語になることにより、女性に対する性犯罪や性暴力の犯罪性が隠蔽されている現状を1998年1年間の『朝日新聞』テレビ欄から、「レイプ」とその関連語および「セクハラ」を抽出して分析する。

2. 強姦ではないレイプ

2.1 番組の種類によることばの選択

一般に、漢字よりひらがな、ひらがなよりカタカナの方が、よりくだけた

表現形態である。だが、強姦を意味する語彙（言い換え語）のヴァリエーションを見てみると（表1）、ひらがなやカタカナでの表記は柔らかく分かりやすいというよりも、むしろ興味本位でふざけた印象を与えている。つまり、信頼性の高い情報ではなく、深刻な問題ではなく、娯楽性が高く、遊びであり、私的で、それゆえ単なるアイキャッチャー（目を引くもの）であることが分かる。

ここで、「レイプ」「（婦女）暴行」ということばに注目してみると、「レイプ」はドラマで13回も登場するのに対して、ワイドショーでは2回、反対に「（婦女）暴行」はドラマでは2回、ワイドショーで23回と数値が逆転する（表2）。この現象は明らかに、ドラマとワイドショーの番組としての役割の違いから生じている。ドラマは基本的に虚構の世界を描くフィクションなので、直接被害者やその家族を特定することがなく、そうした人権に対する配慮を切り捨てることができる。また「強姦」の文字をお茶の間に持ち込むのは不適當で、さりとて「婦女暴行」では娯楽性が欠落して興ざめなので、最も曖昧な語である「レイプ」が使わ

番組の見出しで 使用されたことば	使用回数
（婦女）暴行	30
レイプ	21(1)
ワイセツ	6
犯される[て、た]	5(1)
わいせつ	4
ハレンチ	3(1)
いたずら	2
イタズラ	1
いん行	1
性的虐待	1
性犯罪	1
性暴力	1
不 明	2
合 計	78

（表1）強姦またはその意味を含むことば

*（ ）内は、うち男性被害者または女性加害者の数

* 番組総数75、重複3

レ イ プ	
番組の種類	使用回数
ドラマ	13
ニュース・報道	4
ワイドショー	2
バラエティ	1
情 報	1
合 計	21
（婦女）暴行	
番組の種類	使用回数
ワイドショー	23
ドラマ	2
情 報	2
ニュース・報道	2
バラエティ	1
合 計	30

（表2）レイプ・（婦女）暴行が使用された番組の種類と数

れるというわけである。他方ワイドショーは、のぞき見的娯楽性は高いものの、日々起こる事件・事故を生で伝える報道番組としての機能ももっている。そのために、現在進行中の事件に対する過度の関心を煽ることを避け、婉曲的に「(婦女) 暴行」ということばが多く選択されていると考えられる。

2.2 レイプを用いるねじれた必然性

では、「レイプ」の使用を別の側面から具体的に捕らえてみよう。まずひとつ目は、「教え子レイプ女教師密会の真相」(『モーニング』2/12:ch.10)の見出しに見られるような、加害者が女性、被害者が男性の場合である。ここで重要な点は性別の逆転が起こったことである。まず、「婦女暴行」では実態とことばとが矛盾する。これは、「少年」の中に「少女」も含まれるとか、三人称複数を「彼ら」で代表させるといったことが、ごく自然に受け入れられているのに、男性の「保母」では違和感があるとして、「保育士」とすぐに用語改正がされたり、「帰国子女」を売りにする男性タレントがいない現象とみごとに一致する。どういう状況であれ、女の範疇に男が含まれるという語彙は至って不自然だと解釈されるわけである。女性が被害者のときには可能なのに、男性が被害者のときには、強姦を「婦女暴行」で表すことはできないのである。

次に、上に挙げたタイトルの一部を強姦の別の言い換え語「暴行」で書き換えてみると「教え子暴行女教師密会の真相」となるが、これでは、教え子の性別、強姦か暴力か、誰がその行為者なのか、女教師は誰と密会するのかが、以前にもましてよく分からない。見出しはあくまでもその番組を見せようとするためのアイキャッチャーなので、これでは視聴者を混乱させるだけで、効果は望めそうにない。さらに、「いたずら」や「わいせつ」ということばは、本来強姦行為を表すにはあまりに意味がかけ離れているので、女性から男性への強姦という「ありそうにない事実」を正確に伝えることができなくなる。こうした混乱を少しでも避けるために、ここでは「レイプ」ということばをあてはめたのだと考えられよう。日本語よりエイゴの方が意味が広く曖昧な分、より実態に近くより自然な語として選ばれたのが「レイプ」

ということばだといえるのである。

ふたつ目の「レイプ」使用の例は、子どもに対する性犯罪の表現である。各種メディアでは、子どもが被害者の場合は「いたずら、わいせつ行為」などを用いて、直接的な言及を避けることが多い⁽²⁾。「ゲリラによる少年少女誘拐レイプの悲劇 黒柳徹子が見たウガンダの惨状」(番組名不明、11/22:ch. 10)を例にとると、「強姦」は痛々しすぎて論外であるが、「乱暴の悲劇」では語の連結が不自然で、「暴行」では暴力行為に解釈されてしまうかもしれない。また「いたずら、わいせつ」では事実を歪めるし、黒柳徹子が報道するような国際的な問題を扱う番組としてはふさわしくないと判断したに違いない。そこで、ことばを和らげながらも嘘をついていない「レイプ」ということばを選んだのではないだろうか。もちろん、ここでは少年も被害者であることから、実態とことばが矛盾しないような配慮がなされていることは言うまでもない。

このように、「レイプ」は強姦を表す最も安直で便利なことばである。エイゴであるために、日本語を用いた場合に生じる意味の制約を受けにくい。そのため、人権侵害としての犯罪である強姦行為を婉曲的に表す半面、娯楽としての遊びを演出することもあるという両極端な特徴をもっている。また、女性が強姦されたことを表すことばは状況に合わせてかなり恣意的に使われているが、男性が被害者の場合は、日本語では表しにくかったり、コンテキスト上で矛盾が生じることもあり、使える用語の選択肢が狭められた結果、「レイプ」という語を切り札として用いている。どちらにせよ、「強姦」ということばのもつ重大さや深刻さ、その犯罪性を「レイプ」というエイゴで表すことは到底無理である。

3. 「セクシュアル・ハラスメント」から「逆セクハラ」まで

3.1 省略語のセクハラ

外来語がエイゴになってそれがさらに省略されるのは頻繁に見られる現象である。sexual harassmentは、日本語読みの「セクシュアル・ハラスメント」の頭の2文字をとって、「セクハラ」という四文字四拍のリズムのよい

ことばに変化した。当初「性的いやがらせ」などの訳語も当てられたが、日本語にはなにくく、現在では「セクハラ」の方が定着している。朝日新聞記事検索（DNA）の結果をみると（表3）、「セクシュアル・ハラスメント」を用いた見出しは4件のみで、見出しでも本文でも「セクハラ」を多用している状況がよく分かる。それと共に「セクハラ、セクハラ」と連発されることばの響きは、嘲笑や蔑み、他愛のなさ、軽薄さ、からかいやふざけた雰囲気を作り出した。

（1999年10月現在）

	セクシュアル・ハラスメント	セクハラ
初の見出し	1989年11月16日（夕刊）	1989年12月9日（夕刊）
記事見出し	「セクシュアルハラスメント 法廷の論戦 福岡地裁」	『『ウチのセクハラ』、社内報で特集 広報課の女性コンビ企画』
総件数	4件	950件
初の本文	1988年6月18日（夕刊）	1989年12月9日（夕刊）
記事見出し	「上司かさに迫っちゃダメ 米証取委3幹部にきついおきゅう」	『『ウチのセクハラ』、社内報で特集 広報課の女性コンビ企画』
総件数	156件	1738件

（表3）『朝日新聞』に初めて用いられた「セクシュアル・ハラスメント」と「セクハラ」および総件数

問題なのは、単なる音の響きとしての軽さだけではない。例えば「とりせつ」（取扱説明書）や「チョベリバ」（超ベリーバッド：very bad）が日本語の乱れであるとの批判を受けようとも、「首切り」の意味で「リストラ」⁽⁹⁾を用いるのが誤用であろうとも、こうした省略語の普及が直接社会的な影響を及ぼすわけではない。だが、セクシュアル・ハラスメントが「セクハラ」と略されることによって、セクシュアル・ハラスメントは性的人権侵害としての犯罪行為などではなく、また公的な解決すべき重大な社会問題などでもないということばの響きを作り出しているのである。

3.2 セクハラが使われ方

ことばが普及した割には、セクシュアル・ハラスメントが性暴力であると

いう認識はいまだ低い。それは上記のごとく、性的人権侵害の犯罪行為に対して、「セクハラ」という省略語があてられたことが大きい。ひとつの現象を表すことばが変化して多くの語彙が造り出される過程で、徐々に実態とのずれを生じさせるからである。ことばがひとり歩きし、その意味が拡散して事実を表しにくくなることで、犯罪の実際が見えにくくなってしまう。また、性に関わる用語はすぐにからかいや揶揄嘲笑を伴って使われる傾向にあり、そこにある犯罪行為を社会問題としてではなく社会風俗（＝文化）としてとらえるような風潮を呼ぶ。

性風俗やアダルトビデオ(AV)では、セクハラは性的遊戯の一形態とされている。「レイプ」が強姦罪としての究極的な性犯罪を指し示す一方で、「セクハラ」は、軽度の性犯罪→犯罪行為との境界域にある微妙な性的接触→合法的な性的遊戯というように、性的人権侵害を性的な戯れへとすりかえることが可能なことばなのである。女性から男性へのセクシュアル・ハラスメントを描いたことで話題になった映画『ディスクロージャー』(1995)が、「セクハラの場面をたっぷり見せるあたり、見せどころのツボをはずしていない」⁽⁴⁾や、「過激なセクハラシーンが見もの」「セクハラシーンは迫力十分」⁽⁵⁾と紹介されているのをみると、セクハラ(映画では強姦行為)は興味をそそる過激なセックスシーンと同じものとして扱われていることが分かる。

このように「セクハラ」が本来の意味を離れて「お遊び的性的行為」を示すならば、「乳もみセクハラ報道／周富徳釈明」(『ルック』10/22:ch. 4)(斜線筆者)と「おさわり茶屋殺人事件」(『金さんVS. 女ねずみ』7/11:ch. 10)との表現上の違いはほとんどないといえないだろうか。また「泥酔セクハラおやじVS. 美人タクシー運転手」、「芸能界ゲイセクハラの実態」、「セクハラ決戦」、「ニセ中田がイタリアでセクハラの嵐と逮捕劇」というバラエティ番組や、「セクハラに泣いたストリッパー」というドラマの見出しからは、性暴力の実態とそれを伝える映像は期待できない⁽⁶⁾。

3.3 実体のない逆セクハラ

「セクハラ」ということばが最も多く登場したのは、ワイドショーの18回

であるが（表4）、そのうち歌手の松田聖子関連（12回）では「逆セクハラ」が4回使用されている。説明するまでもないが、女性が加害者側なので、「セクハラ＝男から女への犯罪」⁽⁷⁾、「逆セクハラ＝女から男への犯罪」という公式にあてはめたのである。本来セクシュアル・ハラスメントは、男女双方が加・被害者になりうる犯罪行為なので、「逆セクハラ」は実体のないことばである。おそらくこのことばが広く知られたのは、先に紹介した『ディスクロージャー』であろう。字幕でも、“I’ve never even heard such a thing of a woman harassing a man.”（女が男にいやがらせをするなんてそんなの聞いたことがない）が「逆セクハラとは初めてだ」と訳されている⁽⁸⁾。

セクハラ	
番組の種類	使用回数
ワイドショー	18
バラエティ	15
ドラマ	7
ニュース・報道	5
不 明	2
情 報	0
合 計	47

（表4）セクハラが使用された番組の種類と数

女性が加害者になるということはまれであるから、実際には「逆セクハラ」ということばはそれほど頻繁に使用されていない。しかし、「逆玉」（男が玉の輿に乗ること）や「逆ぎれ」（本来「きれる」べきではない側の人がきれること）のようにことばを造る風潮の中、男性が被害者である状況をおもしろおかしく伝えようとするならば、「男がセクシュアル・ハラスメントを受けた」と表現するよりも「男がセクハラされた」、さらには「逆セクハラ」を使う方が、見出し語として使いやすくまた効果的である。こうした深刻さを欠いた造語によって、「セクシュアル・ハラスメント」という語そのものの意味を混乱させ、一層その実態がつかみにくくなっている。

「セクシュアル・ハラスメント」ということば（概念）が導入され、「セクハラ」ということばが浸透したことで、男性がこれまで慣習的、日常的に行なってきた不快な性的言動が、実は犯罪であったことが広く認識された。その反面、多くの人はいまだセクシュアル・ハラスメントに漠としたイメージを抱いていて、そのイメージのままに「セクハラ」ということばを理解し、感覚的に用いている。番組欄の見出しはそうした意識を反映して作られてい

るといえよう。

4. おわりに

番組欄を眺めて目に飛び込んでくる「レイプ」や「セクハラ」ということばからは、犯罪を犯罪として伝えようとする姿勢はほとんど見られない。多くの場合、アイキャッチャーとして利用され、被害者である女性が如何に卑しめられているか、どのような卑しめられ方をされたのかをのぞき見したいという視聴者の興味をかきたてているに過ぎない。これは男性の「買春」より女性の「売春」が不必要なまでに番組で取り上げられているのに似ている。

「レイプ」というエイゴ、また「セクハラ」といった省略エイゴは、英語本来の意味を薄めたり、曖昧にする負の側面ももっている。さらに、こうしたエイゴにことばが付け加えられて、意味が変質してゆく過程において、女性に対する人権侵害という重大な問題が見過ごされてゆくのである。そこで生じた意味の歪みは目の前にある事実を柔らかに包み隠すため、安易に使われてしまう。こうしたことばの濫用は、加害者側の犯罪性を隠蔽すると同時に、性暴力の実態を見えないものにし、性的な人権侵害を受けた当事者の状況に著しい不利益をもたらしているのである。

註

- (1) 「カリスマ」はもともとギリシャ語のcharismaで、一般には、教祖的な力を指し、人を引きつける強い個性や魅力の持ち主のことをいう。
- (2) 沖縄で米兵が少女を強姦した事件で、大阪市営地下鉄が、『週刊文春』の広告見出しの「レイプ」の文字をテープで隠すという事件があった。原稿段階では「強姦」だったが、新聞社などからクレームがつき「レイプ」に落ち着いた。大阪市交通局は「少女の人権を考えて」の措置とし、文藝春秋は「少しでも強い言葉を使いたかった」と説明している。このように強姦をめぐることばの議論が公にされることは極めて珍しい。(『朝日新聞』1995年10月17日)
- (3) 「リストラ」は英語のrestructuring「リストラクチュアリング」の頭4文字を取った省略語。現在は「リストラされる」と使われるに至り、当初の「企業再構築」という訳

語（概念）はほぼなくなった。そのため「リストラ」ということばが「首切り」を容易にしているという現状もある。「首切り」には不当労働解雇の含みがあるが、「リストラ」には、企業側の存続のための正義しかみえない。

- (4) 「セクハラを題材に娯楽作品 ディスクロージャー」(『朝日新聞』夕刊、1995年2月24日)
- (5) 「ディスクロージャー (勝手にオススメ・CINEMA)」(『朝日新聞』大阪、夕刊、1995年3月7日)
- (6) 順に、『強力！木スペ120分「今夜あなたが目撃者／新宿大捜査！愛と欲望／突撃！危ない現場100連発」(1/29:ch. 8) (斜線筆者)、『躍る！さんま御殿!!』(3/3:ch. 4)、『たけしのTVタックル』(8/3:ch. 10)、『めちゃ×2いけてる!』(12/5:ch. 8)、『はぐれ刑事純情派 (再)』(3/2:ch. 10)。
- (7) 圧倒的に男性の加害者が多い為か、1999年4月に施行された「改正男女雇用機会均等法」では、セクシュアル・ハラスメントの適応は「男から女」の行為に限定されている。
- (8) *Disclosure* Warner Home Video

参考文献

- 阿部一『カタカナ英語の勘違い』(日本経済新聞社、1994年)
- 上野千鶴子＋メディアの中の性差別を考える会編『きつと変えられる性差別語—私たちのガイドライン』(三省堂、1995年)
- おんな通信社編『女子高生コンクリート詰め殺人事件 彼女のくやしさがわかりますか?』(社会評論社、1990年)
- 佐々木恵理「英語の性差別語と日本語人への影響—英語教科書の調査と共に」『ことば』17号(現代日本語研究会、1996年)
- 佐藤弘『外来語と英語のズレ<英語を学び、使う人のために>』(八潮出版社、1994年)